

# 土曜 ライフ・楽しむ

## 迫る古い六歌仙を見習おう

# わたし色

生活情報誌「悠悠と。」

編集長・真鍋康利



がる」

「しわがよるほくらがでできる腰曲がる 頭がはげるひげ白くなる 手はふるう足はよろつく歯は抜ける 耳は聞こえず目はつとくなる」

仙厓義梵という江戸時代の

禅宗のお坊さんによる「老人六歌仙」という墨画の冒頭です。かなり前のことですが、東京の出光美術館で出会い、そこに描かれた6人のお年寄りのほのほのとした笑顔とたたくまいに引かれました。歌は達筆すぎて読めない文字もありますが、説明書の力を借りて内容を知り、思わず笑ってしまいました。

がる」

先日から右足の先がしびれ、ふくらはぎが痛みます。長い運転の後で車を降りたとき、ついに転んでしまいました。これはいかん、とすぐに整形外科を受診し様々な検査を受けました。

結果は「腰も悪いところがあるが、血管が詰まっているのでその方が問題。心臓血管外科を紹介するのですぐに行きなさい」との診断。

紹介された病院でさらにたくさんの検査を受け、「ひざの裏に血栓ができていることが認められるので、血液をサ

ラサラにし、血栓を溶かす薬を飲んで様子を見ましよう。それでよくならなければバイパス手術かな」との宣告。がつくりしましたが、まだ治療の道半ばです。

改めて「老人六歌仙」を読み、あの頃はひとごとと思っていた老人の姿に、気づけば、「あれっ、これってもしかして俺のこと？」と身につまされる年齢になっていました。

いつの間にか、しわもほくろもしみも目立つし、髪は薄く、ひげも白くなりました。耳は遠くなり、目も悪くなり、足がよろづいてついに転んでしまったほどです。杖や尿瓶はまだなので、全体的には50点というところでしょうか。もし100点に近くなくても、絵にある六歌仙のようにほのほのと笑って過ごせるようになりたいものです。

最近読んだ直木賞作家朝井まかてさんの「銀の猫」という小説の中に出てきたので、しばらくぶりに思い出しました。江戸時代の介護の話で、嫁き先を離縁され、介抱人、今でいうヘルパーとなって稼ぐお咲が、介護の現場で様々な経験を語る物語です。お咲が介護するお年寄りがこの歌を口ずさむ場面が出てきます。

歌はさらに続きます。

「身に添うは頭巾襟巻き杖 目鏡 たんぽおんじゃくしゅびん孫の手 聞きたがる死にとむながる淋しがる 心は曲がる欲深くなる くどくなる 気短かになる愚痴になる 出しゃばりたがる世話やきたがる またしても同じ話に子を誉める 達者自慢に人はいや